

《幼児教育》

自己肯定感を育む人間関係を培うための環境構成と援助の工夫 ～友達とのつながりを感じる伝承遊びを通して～

那覇市立城北こども園 保育教諭 宇禄 真由美

I テーマ設定の理由

めまぐるしく変化する社会に対応する「生きる力」を育むために、幼児期に質の高い教育を受けることの重要性が様々な研究で示されている(OECD, 2015等)。これらを受け、中央教育審議会(以下中教審)「幼児教育部会における審議の取りまとめ」(2016)では、幼児期に忍耐力や自己制御、自尊心といった社会情動的スキルいわゆる非認知的能力を育むための教育の充実を提言している。この非認知的能力は、幼保連携型認定こども園教育・保育要領(以下教育・保育要領)において「幼児期に育みたい3つの資質・能力」に反映されている(中教審, 2016)。また教育・保育要領「人間関係」の領域は、自己肯定感をもって行動できるようにすることや協同性、自己調整力等を育むことが示されており、非認知的能力に関わる内容であるとされている(無籐, 2016)。中でも自己肯定感については教育・保育要領解説第1章第3節5(2)において、園児の自分に対する自信や自己肯定感を育てていくことは、教育及び保育の大切なねらいの一つであるとされ、園児は、周囲の人から受け止められ認められることで、自己を肯定する気持ちが育まれるとしている。これより非認知的能力の育ちには、保護者や周りの人たちとの温かい関係の中で基本的信頼感を築き、自己肯定感を育むことが重要であると考えます。

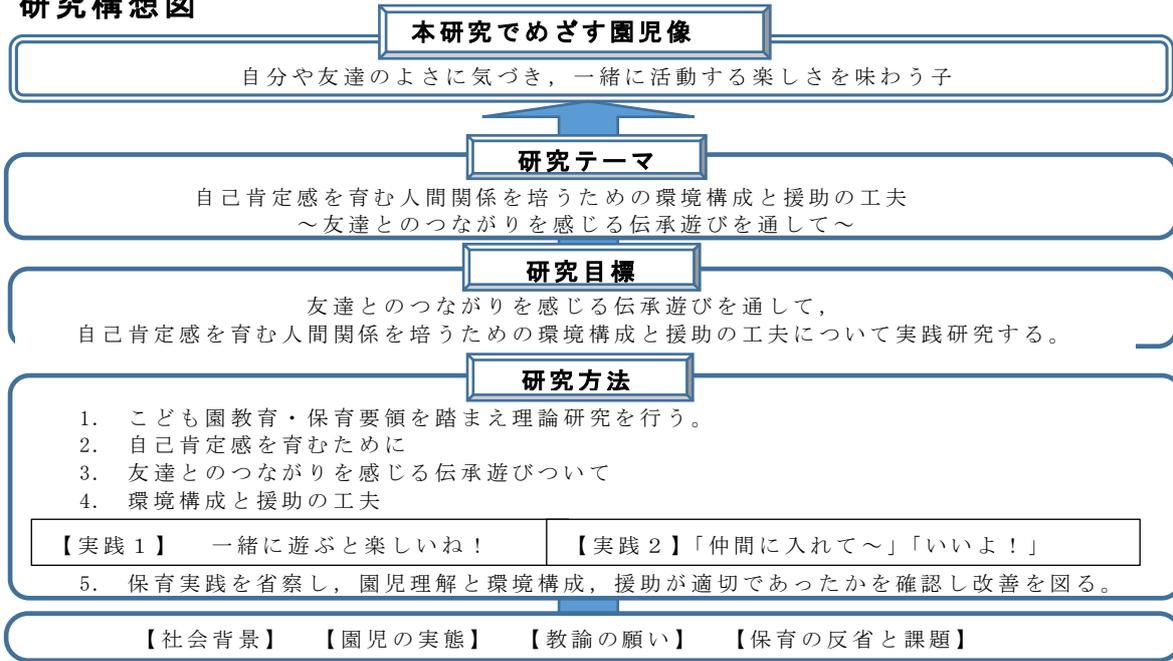
本園の園児の実態としては、好きな友達と一緒に遊びを楽しむ姿が見られる。一方で、自分に自信がなく、友達に思いを伝えることができない姿や去年からの友達関係が強く、新しい関係が広がりにくい様子が見られる。私自身の保育を振り返ってみると、活動を計画通りに進めようとしたり、「時間だから」と遊びを止めてしまったりして、園児の気持ちに寄り添えずに、保育を進めてしまうことがあった。そのため園児が互いを受け止め認め合うような援助が十分ではなかったと考える。園児が自分の思いを大切に、保育教諭やいろいろな友達と触れ合う中で、互いを受け止め認め合う関係を築くための援助について考えていきたい。

本研究では友達と一緒に遊びの楽しさを共有し、受け止めてもらう喜びを感じることができる遊びとして伝承遊びに注目する。伝承遊びを楽しむ中で、友達とのつながりを感じ、仲間として受け止められる経験を積み重ねることによって、他者への信頼感や自己肯定感が育まれるのではないだろうか。そこで伝承遊びを通して、自己肯定感を育む人間関係を培うための環境構成と援助の工夫について研究したいと考え、本テーマを設定した。

II 研究目標

友達とのつながりを感じる伝承遊びを通して、自己肯定感を育む人間関係を培うための環境構成と援助の工夫について研究する。

Ⅲ 研究構想図



Ⅳ 研究内容

1 『自己肯定感』を育むために

(1) 非認知的能力における自己肯定感

非認知的能力は社会情動的スキルとも呼ばれ、「目標の達成」「他者との協働」「情動の抑制」の3点から捉えられている（無籐 2016, 図1）。また幼児期に非認知的能力を育むことが、その後の成長に様々な影響を与えることが示されている（無籐, 2016）。

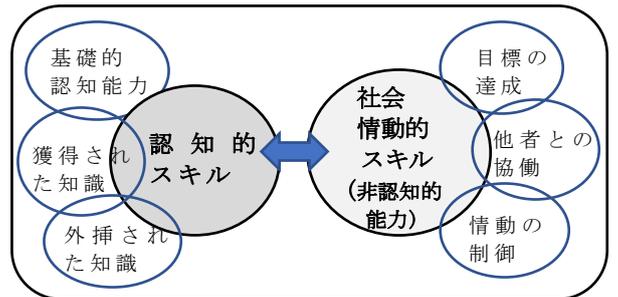


図1 認知的スキル、社会情動的スキルのフレームワーク
(社会情動的スキルを育む「保育内容人間関係」(2016))

幼児期に非認知的能力を育むためには、身近な人との深い信頼関係の中で様々な人と接し、幼児が前向きな見通しを持ったり、自分のよさや特徴に気づき、自信を持って行動したりするようになることが大切であるとされている(中教審, 2016)。また教育・保育要領(2018)では、園児が自信を獲得できるように、保育教諭が適切に働きかけることが自己肯定感を育むとされている。これより非認知的能力を育むためには、身近な人との信頼関係を築き、自己肯定感を育むことが重要であると考えられる。

(2) 自己肯定感の育ち

自己肯定感は保育用語辞典(2016)によると「自分が生きていること、していることなど、自分の存在や人格、行動をポジティブに評価し、それに価値があると感じられること」と記されている。

鯨岡(2013)は、自己肯定感の育ちについて、乳児期に重要な大人から大事に思ってもらえる経験を繰り返すことを通して、重要な大人への肯定的なイメージと同時に、自分への肯定的なイメージが築かれると述べている。そして幼児期には、子どもの能動的な力とそれが外界に及ぼす様々な効果から、子どもには「これができる」という自己効

力感が生まれ、それが乳児期にかたちづくった自己肯定感の根に接続され、本格的な自己肯定感が育つとしている。また友達との関係の中で肯定的な経験をすると「友達と仲良くできる私」「友達に認められる私」という形で自己肯定感のさらなる育ちにつながるとされていることから、幼児期において友達との関係が重要であるといえる。

そこで本研究では、保育教諭との信頼関係の下、友達と一緒に活動する中で互いに受け止め認められたりする関係を築くことが、肯定的な経験を重ねることとなり、自己肯定感を育むことにつながると考える。

2 友達とのつながりを感じる伝承遊びについて

本研究では友達とのつながりを感じ、互いに受け止め認められたりできる遊びとして伝承遊びを取り上げる。保育用語辞典(2016)において、伝承遊びは「世代を超えて楽しめるものであること、身体を動かしたり歌ったりして楽しむこと、遊びながら子どもどうしの相互関係性を経験できること、というような意義がある」と記されている。また西村(2012)は、伝承遊びを遊びの内容や機能的側面で分類している(表3)。そして伝承遊びが伝えられるため不可欠な要素を示し(表4)、伝承遊びは単なる「形の伝承」ではなく、遊びの中に含まれている「質」が大切だと述べている。

さらに吉岡(2009)は、伝承遊びを「できるようになる」ことではなく、「互いを認め合う人間関係を育むこと」を目的として、伝承遊びの教育的効果と効果を得るための配慮を示している(表5)。

表3 伝承遊びの分類

機能的側面	遊びの内容
模倣的遊び ごっこ遊び	ままごと・チャンバラごっこ 忍者ごっこ等
歌にあわせた 遊び	絵描き歌・お手玉・手あわせ歌 まりつき・わらべ歌・子守歌等
全身をたくさ ん使う遊び	鬼ごっこ・エスケン・缶けり 馬とび・おしくらまんじゅう かくれんぼ・縄跳び等
身近なもので できる遊び	折り紙・笹舟・じんとり・パチ ンコ・吹き矢・松葉ずもう・竹 トンボ等

表4 伝承遊びの要素

1	一緒に遊ぶ仲間がいること
2	年齢差・性別にあまりこだわりがないこと
3	ルールがわかりやすいこと
4	遊びのために必要な準備が簡便なこと
5	人数によって柔軟に対応できること
6	道具・リズム(伴奏)の取り方など、アレンジができること
7	身近に適当な場所があること
8	本来は特別な指導者を必要としないこと
9	園児たちの創意によって、展開に工夫を凝らすことができること

表5 集団による伝承遊びの教育的効果と効果を得るための配慮

教育的効果	<ul style="list-style-type: none"> ○コミュニケーション能力を育む…意見を言う、意見を聞く、人前で話す、意思表示をする ○ルールを守る規範意識を育む…ルールを守って遊ぶ、ルールの必要性を知る ○工夫し考え創造する力を育む…遊び方を工夫する、新しい遊び方を見つける、遊び方を友達に伝える ○意欲を高める…再挑戦する、負けたくない、我慢する、集中して遊ぶ ○集団意識の芽生えを育む…応援する、味方を守る、いたわる、友達を意識する、仲間意識を持つ
	<ul style="list-style-type: none"> ○少人数集団(5~10人程度)…互いの声や表情が伝わりやすくすることが必要である。 ○異年齢集団による効果…年下へのいたわりや優しさの気持ちが芽生える機会を大切にす。 ○話し合いの機会…勝負に勝つための知恵や工夫を子ども同士で考え合う場を大切にす。 ○遊びに適したスペース…必ず広い場所が必要ではない。遊びに応じて考慮する必要がある。 ○遊びの継続と再挑戦…繰り返すことで遊びの楽しさや魅力を感じる。相手を変えたり、遊びを工夫したりする。勝敗のある遊びは再挑戦の機会を作ることが必要である。 ○リズム、表現…歌やリズムを通して自分らしさが発揮できる機会を作ることが必要である。
配慮	

本研究では伝承遊びの中でも園児が親しみやすい表3の「歌に合わせた遊び」や「全身をたくさん使う遊び」を取り上げ、実践する。そして表4の「一緒に遊ぶ仲間」を感じ、「ルールがわかりやすく」、「リズム」に合わせて友達とのつながりを感じるこ

ができる伝承遊びが、互いを受け止め認め合い、自己肯定感を育む友達関係を築くために有効だと捉え、研究を進める。また表5の配慮点に留意しながら実践していく。

3 友達とよりよい関係を築くための環境構成と保育教諭の援助の工夫

(1) 遊びの場における環境構成と援助の工夫

教育・保育要領解説では、自己肯定感を育む友達関係を築くためには、園児の自発性や探索意欲が高まるような環境を計画的に構成し、遊びの展開に応じて環境の再構成も大切であるとしている。また、保育教諭と園児との信頼関係を築き、園児が環境に関わる姿を見守り、受け止めることが重要であるとしている。これらを踏まえ無籐・古賀(2016)を参考に、環境構成と援助の工夫の視点について表6を作成し、実践していく。なお保育教諭の援助においては、遊びの中で総合的に援助するものであり、順序よく援助するものではないものとする。

表6 環境構成と援助の工夫と予想される園児の姿

環境構成と援助の視点	○環境構成	◎援助の工夫	予想される園児の姿
【視点1】 受け止める	<ul style="list-style-type: none"> ○楽しい雰囲気を感じながら保育教諭と一緒に遊ぶことができる場や保育教諭の近くで安心して遊ぶことができる場を作る。 ○手遊び歌、わらべ歌を保育教諭や友達と一緒に楽しむ場を作る。 (げんこつ山の狸さん・お寺の和尚さん・せんべいやけた等) 	<ul style="list-style-type: none"> ◎表情や様子から不安な気持ちを受け止め、気持ちを分かち合い、支え、あたたかく見守る。 ◎話を聞いてもらう喜びが味わえるよう一人一人の気付きや発見を認め、共感する。 ◎手合わせ遊びやわらべ歌を伝え、楽しい気持ちを共有する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・温かく見守られ安心感を持ち、安定した気持ちで遊ぶようになる。 ・話を聞いてもらったことを喜び、自ら保育教諭や友達に話すようになる。 ・保育教諭や友達と一緒にわらべ歌を楽しむ。
【視点2】 つなぐ	<ul style="list-style-type: none"> ○園児同士のかかわりが生まれる遊具や材料の配置と数を十分に用意する。 ○身近に伝承遊びを楽しむことができるように時間や場を設定する。 (はないちもんめ・だるまさんがころんだ・あぶくたった・かごめかごめ・引越し鬼・昼か夜か電信か・ゴム飛び・ハンカチ落とし・じゃんけん列車等) 	<ul style="list-style-type: none"> ◎互いの思いを言葉で伝えたり、知ったりできるように支える。言葉が足りないところは、補いながらつないでいく。 ◎それぞれの思いや考えを共有できるように保育教諭が思いをくみ取り代弁し、互いの思いをつなぐ。 ◎友達とのつながりを感じられる遊びを伝え、様々な友達との関係をつなぐ。 	<ul style="list-style-type: none"> ・友達や保育教諭と一緒に思いや考えを伝え合いながら遊びを進めるようになる。 ・友達の遊びの楽しさを知り、友達と一緒に遊びを楽しむようになる。 ・友達の遊びと自分の遊びのよさを合わせて、新しい遊びを創り出すようになる。
【視点3】 向き合う	<ul style="list-style-type: none"> ○自分の経験が身近な友達に伝わるような小集団の中で話す場を作る。 ○意見の違いや葛藤場面においても、園児が自分や友達と向き合えるように時間や場所を確保する。 ○園児自身が遊び方を工夫できる時間や場所を確保する。 	<ul style="list-style-type: none"> ◎自分の思ったことを話したり、友達の話を聞いたりすることで、友達との関わりを楽しめるように援助する。 ◎葛藤場面において、園児が自分自身や友達と向き合うことができるように支える。 ◎相手との思いの違いを知り、相手の表情や言葉を読み取り、自分はどうしたいのか考えようとする間を大切に声かけする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「こうしてみたい」「次はこうしよう」等、遊びに期待感を持つ。 ・友達と一緒に遊びを通して感じたことや考えたことを伝え合う。 ・友達の遊びを見て、一緒にやってみたり、考えたりする楽しさがわかるようになる。 ・友達と一緒に遊び方を変えたり、遊ぶ仲間を変えたりしながら伝承遊びを楽しむ。

(2) 活動前後における振り返りの場の設定と援助の工夫

教育・保育要領解説においては、「友達との様々な心動かす出来ことを共有し、それぞれの違いや多様性に気づくことが大切である」とされている。また汐見(2017)は、これからの保育において「①経験したことを『共有』する、②経験を『連続』させる、③経験を『可視化』する」という3つの実践の重要性を示している。そこで、園児たちが遊びを振り返って楽しかったことを共有し、また遊びたいと思えるような振り返りの場を設定する。

表7 振り返りの場での援助の工夫と予想される幼児の姿

援助の視点	保育教諭の援助の工夫	予想される園児の姿
【視点1】 経験の 「可視化」	<ul style="list-style-type: none"> 活動後に写真を見せて、具体的な場面が思い出せるように話し合いを進める。 園児が友達同士で遊びを振り返ることができるようポートフォリオ等を作成し、翌日園児の目の届くところに置く。また次の活動の導入につなげる。 	<ul style="list-style-type: none"> 友達と遊んで楽しかったことや嬉しかったこと、悔しかったことを話し、認め合ったり、解決し合ったりする。 写真を見ながら、遊びを振り返り、自分や友達のよさに気づく。
【視点2】 経験の 「共有」	<ul style="list-style-type: none"> 身近な友達との経験がクラスの友達の経験につながるような話し合いの場を作り、共感する。 自分や友達のよさに気づき、共感できるよう、互いに伝え合えるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> 身近な友達に気持ちを伝えられたことを喜ぶ。 友達の遊びの面白さに気づき、やってみたいという気持ちを持つ。
【視点3】 経験の 「連続」	<ul style="list-style-type: none"> 自分の思いや考えを受け止めてもらえた喜びを園児同士が伝え合えるように促し、園児同士をつなぐ援助を意識する。 「また遊びたい」「次はあの子と遊んでみたい」という意欲がもてるような援助を意識する。 	<ul style="list-style-type: none"> 仲間に入れてもらえた喜びを保育教諭や友達に話すようになる。 友達と一緒に遊ぶ楽しさを感じ、友達のよさを認める姿が見られる。 友達に受け止め認められることで、自信を持って行動できるようになる。

V 保育実践

1 保育計画

(1) 実態把握(4, 5月)

本研究は年長クラス(にじ組, 24名)が対象である。進級児が9名おり、クラスのほとんどが集団生活の経験がある。園生活に慣れ、好きな友達と一緒に遊びを進める姿が見られる。一方で、自分に自信がなく、友達に思いを伝えることができない姿や、去年からの友達関係が強く新しい友達関係が広がりにくい様子が見られる。園児が自分の思いを大切にし、友達とのつながりを広げていくという点に関して課題が見られる。

実態調査として対象クラスの園児に対し、「よく遊ぶ友達の名前」の聞き取りを行った。また先行研究(箕浦・成田 2013, 中井 2016)を参考に「自分にはいいところがあると思う」「自分のことが好きだ」という項目で自分を肯定的に思っているかどうかの調査を行い、2つの結果をもとに抽出児を検討した。

(2) 保育計画

園児の実態から幼児理解を深め、発達の過程に応じた実践となるよう、6月中旬に実践1, 6月下旬から7月上旬の期間を実践2とし、実践に取り組んだ。

実践	ねらい(○)内容(●)
実践1 「一緒に遊ぶと楽しいね！」	<ul style="list-style-type: none"> ○友達と一緒に伝承遊びを楽しむ。 ●いろいろな伝承遊びを知る。●友達と触れあって遊ぶ。
実践2 「仲間に入れて～」「いいよ！」	<ul style="list-style-type: none"> ○友達を受け止め認め合って伝承遊びを楽しむ。 ●伝承遊びを通して互いを受け止め認めあって遊ぶ。 ●他の年長クラスや年中クラスに伝承遊びを伝え、一緒に遊ぶ。

2 実践1「一緒に遊ぶと楽しいね！」（6月中旬）

（1）遊びを楽しむ園児の姿

実践1では、伝承遊びをクラスで取り組んだ。そこでは保育教諭が伝承遊びを紹介し、園児が興味をもつことができるような環境構成の工夫を行った。また遊びの直後に振り返りの場を設けた。その際遊びの様子を写真で提示し、その時の様子を思い出しながら、自分の思いを言葉で伝え、友達や保育教諭と共有し、認められる機会を作った。保育終了後には、遊びの様子を写真で提示し、園児が遊びを振り返り、次の遊びへの期待につながられるようにした。提示用の写真には、振り返りの中での園児の気づきや感じたことを記述した。

○ねらい ・ 内容 ◇環境構成 ◎保育教諭の援助	
○友達と一緒に伝承遊びを楽しむ ・ いろいろな伝承遊びを知る。・ 友達と触れあって遊ぶ。	
伝承遊びの場 【受け止める】【つなぐ】【向き合う】	振り返りの場 【可視化】【共有】【連続】
◇クラスで遊ぶ（教室→遊戯室→園庭）。 ◇歌詞カード掲示や道具を準備する。【つなぐ】 ◇遊びの場を作るために線をひく。 ◎園児と一緒に楽しむ。【受け止める】 ◎園児の思いや言葉に共感する。【受け止める】 ◎園児同士の思いをつなぐ【つなぐ】	◇写真を使って、遊びや友達との関わりを振り返る。【可視化・共有】 ◇遊びの写真を掲示する。【可視化】 ◎楽しかったこと、嬉しかったこと等を共有する。【共有・連続】
《取り組んだ伝承遊び》 ・げんこつやまのためきさん ・お寺の和尚さん ・せんべいやけた ・なべなべそこぬけ ・かごめかごめ ・はないちもんめ ・鳥ゴムとび ・昼か夜か電信か ・引っ越し鬼 ・ゴロゴロドカン	 

☆実践1（6月中旬）に見られた園児の姿



☆互いに目を合わせたり、手を合わせたりと笑顔で遊ぶ姿が見られた。



☆触れ合ったり、名前を呼び合ったりして、遊ぶ姿が見られた。
 ☆友達が動きやすいように考える姿が見られた。



☆振り返りの場では「楽しかった」という声が多かった。また「友達の笑顔が嬉しかった」と話す子もいた。

（2）考察

歌やリズムに合わせて、体を使った伝承遊びの中で、保育教諭が園児の気持ちを受け止め、園児同士をつなぐ援助をすることで、園児が互いに目を合わせ、名前を呼び合い、笑顔が増えてきた。この姿より園児は気持ちが和らぎ、友達との触れあいを楽しむことができたと考える。

活動後の振り返りの場では、園児が遊びの中で感じたことを、保育教諭が引き出し、園児の思いを共有することで、園児から「いろんな友達と遊べた」「友達の笑顔が嬉しかった」という声が聞かれた。思いを共有することで、友達のよさに気づき、また一緒に遊びたいという気持ちにつながったと考える。このように伝承遊びと活動後の振り返りの援助を通して実践1のねらいである「友達と一緒に伝承遊びを楽しむ」姿につながったといえる。

3 実践2「仲間に入れて～」「いいよ！」(6月下旬から7月上旬)

(1) 友達の思いを受け止め認め合う姿

実践1はクラスで伝承遊びを行ったが、実践2では他の年長クラスや年中クラスとも伝承遊びを楽しむ場を設定した。その際、伝承遊びの場において園児同士で話し合ったり、互いの考えに向き合ったりできるように援助した。また振り返りの場では、遊びの中で互いの思いやいいところを伝え合う時間を設け、友達によさに気づき、共有できるように援助した。

○ねらい ・内容 ◇環境構成 ◎保育教諭の援助

<p>○友達を受け止め認め合って伝承遊びを楽しむ ・伝承遊びを通して互いを受け止め認め合って遊ぶ。 ・他のクラスに伝承遊びを伝え、一緒に楽しむ。</p>	
<p>伝承遊びの場 【受け止める】【つなぐ】【向き合う】</p> <p>◇園庭で他のクラスと一緒に遊ぶ。【つなぐ】 ◇伝承遊びコーナーの地図を作る。【つなぐ】 ◇友達と思いを伝え合える場や時間を作る。【向き合う】</p> <p>◎他クラスの園児にも遊び方が伝わるように園児同士をつなぐ。【つなぐ】 ◎楽しいことや困ったことに共感し、周りの園児と一緒に話し合う。【受け止める・向き合う】</p>	<p>振り返りの場 【可視化】【共有】【連続】</p> <p>◇写真を使って、遊びや友達との関わりを振り返る。 【可視化・共有】 ◇遊びの写真を掲示する。 【可視化・共有】</p> <p>◎互いをよさに気づく姿を認め、嬉しい気持ち共有できるように援助する。 【共有・連続】</p>



★実践2(6月下旬～7月上旬)に見られた園児の姿

<p>☆自然と「仲間に入れて」「いいよ！」という言葉が出てきた。</p>	<p>☆友達同士で話し合い、互いに思いを伝えながら遊びを進める姿が見られた。</p>	<p>☆年中児との遊びの中で、年下の子に合わせた遊び方を考えたり、優しくしたりしていた。</p>	<p>☆振り返りの場で、互いのよさを伝え合い「一緒に遊んでくれて嬉しかった」という声が聞かれた。</p>
--------------------------------------	--	--	--

《事例1》友達の思いに向き合う姿
ゴロゴロドカンの遊びで、鬼役の子が「ドカン！」と言ったところ、A児でボールが止まった。鬼が目隠しを渡そうとすると、A児の表情がこわばり、ボールを握りしめる。一緒に遊んでいた子が「鬼やりたくないの？」と聞くと、A児はだまっただまだった。他の子に「ダメだよ～(鬼)代わらないと～」と言われ、A児は固い表情になった。始めに声をかけた子がもう一度「鬼やりたくないの？」とA児の顔をのぞき込みながら聞くと、ようやくうなずく。「じゃあ代わるよ～」と周りの子が鬼役を快く引き受けた。またみんなで一緒にゲームを再開できた。

《保育教諭の見取り》
A児は恥ずかしがり屋で、鬼になって合図を出すことに自信がない様子だった。やらないといけないと分かっているけどやりたくない。その子に対して周りの子が友達の思いと向き合い、思いを受け止めることができた。実践を通して保育教諭が園児の話聞き、向き合う援助をしたり、伝承遊びの中で園児同士が互いを認め合う経験を繰り返してきたことによって、保育教諭が側にいなくても、園児同士で互いに向き合い、思いを認め合って遊びを進める姿につながった。

《事例2》年下の子に優しくする姿
引越し鬼の遊びで年中児が鬼役B児にタッチされ、泣き出してしまった。B児は驚いて固り、周りの子が「大丈夫？」と年中児に声をかけた。保育教諭は年中児とB児の気持ちを受け止めながら、どうしたらみんなでも楽しめるか話し合えるよう援助した。年長児の一人が年中児が入った時はゆっくり歩いたり、ケンケンしたりするという考えを提案した。するとみんなは「いいね！」と受け止め、ゲームを再開した。でもまだ不安そうな年中児。その様子を見たB児が「はな組はオレが守る！」と年中児の手を握り、一緒に走り出した。無事に鬼から逃げ切ることができ、B児と年中児は笑顔でハイタッチを交わした。

《保育教諭の見取り》
保育教諭が受け止め、向き合う援助をし、園児同士をつないだことで、年長児が年中児と一緒に遊ぶ仲間として受け止めようとする様子が見られた。また「いいね！」という園児の言葉によって、互いを認め合う姿につながった。そして、B児も遊びの中で年下の子への思いやりの気持ちが芽生え、違いを受け止めて遊びを進めることにつながった。

(2) 考察

実践2において保育教諭は特に、伝承遊びの中でつなぐ・向き合う援助を、活動前後の振り返りの場の中で経験を共有・連続させる援助を繰り返し行った。伝承遊びを遊び込む中で自分の思いを伝えたり、友達の思いを聞いたりする姿が見られるようになった。中でも年中児との関わりを通して、安心させようと手をつなぐ姿や、年中児に合わせた遊び方を考える姿等、年下への優しい気持ちが芽生える様子が見られた。これらのことから、自分を受け止めてもらえる喜びを味わうことができたり、相手の思いを受け止めたりすることで、互いを受け止め認め合う姿につながったと考える。

4 実践1・2を通しての園児の変容

(1) 実践前後の園児の変容（調査結果）

実践前後に「よく遊ぶ友達の名前を教えて」と、園児に聞き取りを行った。実践前は、よく遊ぶ友達について平均2.4人の名前があがり、名前を一人もあげられない子もいた。しかし実践後は、平均5.5人の名前があがり、名前を言えない子は1人もいなかった（図3）。

また活動後の振り返りの場面において、園児は「楽しかった」と答える姿があった。どんな時に楽しかったかについて聞き、園児の話した内容を分類すると、「触れ合うこと」「受け止めてもらったこと」「自分や友達のよさを見つけたこと」の3つに分けることができた（表8）。

(2) 抽出児の変容

実践前の調査で、自分のことを肯定的に捉えることができず、自分から友達に関わろうとする姿が少ない子を抽出児とした。実践当初、3名の抽出児はそれぞれ緊張感が強く、表情も硬かった。しかし保育教諭が抽出児の気持ちに寄り添い、受け止める援助や他の園児とつなぐ援助を重ねることで、3名とも実践前より実践後の方がよく遊ぶ友達の名前を

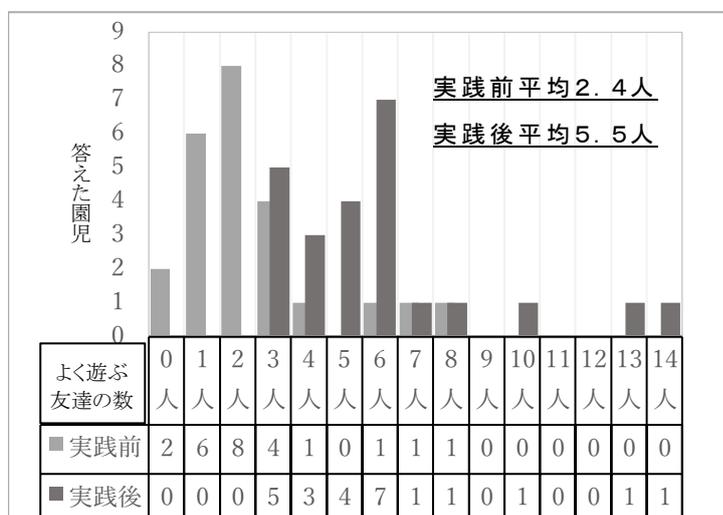


図3 よく遊ぶ友達の数（園児からの聞き取り）

表8 振り返りの場における園児の発言

内容	園児の発言
『触れ合う』	「〇〇さんと手をつないだのが嬉しかった」 「タッチされたのが嬉しかった」
『受け止めてもらった』	「〇〇さんの笑顔が嬉しかった」 「名前を呼ばれるのが嬉しかった」 「仲間に入れてもらった」
『自分や友達のよさを見つけた』	「前は鬼になるのを嫌だったけど、今日は鬼になった」 「ずっとタッチされなかった」 「〇〇さんは足が速かったよ」 「〇〇さんは、年中さんに優しくできていたよ」

表9 抽出児がよく遊ぶと名前をあげた友達の人数

	C児	D児	E児
実践前	1人	0人	1人
実践後	7人	3人	6人

多くあげることができた（表9）。また、遊びや生活の中において友達との関わりを楽しむ姿が見られるようになった（表10）。

表10 実践1・2を通しての抽出児の変容

		C児	D児	E児
4・5月	園児の姿	<ul style="list-style-type: none"> ・新入園児。保育歴あり。 ・登園時、不安そうな様子。 ・<u>表情に自信がない様子</u>がうかがえる。 ・<u>特定の子と一緒に遊ぶ</u>ことが多い。 	<ul style="list-style-type: none"> ・昨年7月まで本園に通う。その後家庭保育。 ・友達の輪に入りたい様子が見られるが、一人では声をかけられない。 ・<u>一人遊びが多い</u>。 	<ul style="list-style-type: none"> ・新入園児。保育歴あり。 ・登園時、不安そうな様子。 ・<u>保育教諭の手伝いをして安定している</u>。 ・保育園からの友達と遊ぶことが多い。
実践1	園児の姿	<ul style="list-style-type: none"> ・伝承遊びを通して<u>だんだん笑顔が見られてきた</u>。 ・グループ活動時は、初めは友達の指示を待つ姿が見られたが、<u>徐々に考えを伝えることができるようになってきた</u>。 	<ul style="list-style-type: none"> ・クラスの活動で二人組になる時は、消極的であり、<u>表情が硬かった</u>。 ・グループ活動では、同じ遊びを楽しむ中で徐々に<u>表情が和らぎ、笑顔が見られた</u>。 	<ul style="list-style-type: none"> ・鬼になった時は、<u>恥ずかしがってしまい、固まってしまった</u>。 ・友達がくぐりやすいように、一生懸命腕を伸ばしたりする姿があった。
	保育教諭の見取り	<ul style="list-style-type: none"> ・保育教諭の【つなぐ】援助によって、友達を身近に感じ、充実感を味わうことができ、本児の笑顔につながった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・保育教諭が本児の気持ちを【受け止める】ことで、安心してきた。【つなぐ】援助によって、友達と一緒にいる心地よさを味わった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・本児の頑張りや保育教諭が【受け止め】認めることで、満足感を味わうことができた。今後も肯定的な経験を重ねさせたい。
実践2	園児の姿	<ul style="list-style-type: none"> ・気の合う友達と伝承遊びをする姿が見られた。 ・年中児との関わりでは、優しく声をかける姿が見られた。 ・<u>他のクラスの子とも伝承遊びを一緒に遊ぶ姿が見られた</u>。 ・振り返りの場で発言しようとするが増えた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・<u>友達の輪に自ら入り、好きな伝承遊びを繰り返し遊ぶ姿が見られた。笑顔を見せながら、思い切り走る姿</u>があった。 ・年中児とも触れ合って遊ぶ姿が見られた。 ・振り返りの場で、楽しかったことを伝えることができた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・気の合う友達と一緒に伝承遊びを楽しむ姿が見られた。 ・<u>気の強い友達とのトラブルもあったが、互いに思いを伝え合いながら伝承遊びを進める姿</u>が見られた。 ・年中児に、優しく接する姿があった。
	保育教諭の見取り	<ul style="list-style-type: none"> ・本児の思いを【受け止める】援助によって友達にも自分で思いを伝えることが増えてきた。 ・年中児と【つなぐ】ことで本児の優しい面が年中児に伝わり、本児の自信につながった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・友達と【つなぐ】援助を重ねることで、友達と遊ぶ充実感を味わうことができた。友達の輪の中で遊ぶ楽しい経験が、肯定的な経験となって、自分の思いを伝えたいという気持ちにつながった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・葛藤場面の中で【向き合う】援助によって、自分の思いを友達に伝えられるようになってきた。 ・他クラスと【つなぐ】ことで気の合う友達が増え、友達関係が広がった。

(3) 考察

調査結果において、実践前より実践後によく遊ぶ友達の名前を多くあげられ、抽出児においても同じ結果が見られた。このことから、自分から友達に関わることが少なかった子も、保育教諭が園児同士をつなぐ援助をすることによって友達との関わりを広げることができたといえる。

また園児が楽しかった理由に「触れ合うこと」「受け止めてもらえたこと」「自分や友達のよさを見つけたこと」を話す姿が見られた。伝承遊びを活用し、友達とのつながりを感じる中で、園児は友達と触れ合いを喜び、自分を受け止めてもらったり友達のよさを認めたりしながら、友達との関わりを楽しむことができたといえる。これらのことから、実践1・2を通して、園児は友達との関わりの中で肯定的な経験を重ねることができたと考える。

VI 実践を通しての考察

本研究では、幼児理解に基づく環境構成の中で、保育教諭は伝承遊びの場において受け止める・つなぐ・向き合うという3点、振り返りの場では経験を可視化する・経験を共有する・経験を連続するという3つに視点をおいて援助の工夫を行い、実践に取り組んだ。実践1では伝承遊びを通して、保育教諭の受け止める・経験を共有するという援助によって、また一緒に遊びたいという関係を作ることができた。実践2において伝承遊びの中で保育教諭のつなぐ・向き合う援助や振り返りの場において経験を共有・連続させる援助を重ねることで、友達によさに気づき、互いを受け止め認め合う関係作りにつながった。

実践を通して、園児が友達によさに気づくよう援助するために、保育教諭は園児のよさを捉え、意識して声をかけることが増えた。園児のよさを見つけようとする保育教諭の援助が、園児同士の互いを肯定的に捉える姿につながり、友達関係の広がりや園児が自分を肯定する経験につながったと考える。また振り返りの場をもつことで、園児が活動を振り返るだけでなく、保育教諭も園児の思いや気づきを知ることができ、今まで以上に園児の思いに寄り添うことができた。

これらのことから様々な友達とつなぐ環境を整え、援助することで、「友達と仲良くできる私」「友達に認められる私」を実感し、友達との関係の中で自分のことを肯定的に捉える経験ができたといえる。さらに友達によさに気づき、一緒に活動する楽しさを味わい互いを受け止め認め合う関係作りができたことから、自己肯定感を育む関係を培うことにつながったといえる。

VII 成果と課題

1 成果

- (1) 伝承遊びの特性を活用したり、活動後の振り返りの場で互いのよさや思いを共有したりすることで、「友達と一緒にいることが嬉しい」「楽しい」と思うことができた。これが、友達とのつながりを感じて遊びを楽しむ姿につながった。
- (2) 保育教諭が園児の思いを受け止め、園児同士をつなぐことで、園児は自分の思いを伝えたり、友達の思いやよさに気づいたりすることができた。これが互いを受け止め合い認め合う関係作りにつながった。

2 課題

- (1) 活動後に遊びを振り返る際、遊びを広げたり、考えを深めたりできるような写真の活用法や掲示の工夫を考える必要がある。
- (2) 保育教諭が園児の思いを引き出すだけでなく、友達によさについて気づきを深めていけるような発問を工夫し、園児同士の対話が広がる援助の工夫が必要である。

《主な引用文献》

- 『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』内閣府・文部科学省・厚生労働省 フレーベル館 2018
『新版・保育用語辞典』谷田貝公昭編 一藝社 2016
『社会情動的スキルを育む「保育内容 人間関係」』無藤隆・古賀松香編 北大路書房 2016
『子どもの育ちをエピソードで描く—自己肯定感を育てる保育のために—』鯨岡峻 ミネルヴァ書房 2013
『絆づくりの遊びの百科—伝承遊びから現代風遊びまで—』西村誠・山口孝治・榎岡義明監修 昭和堂 2016
『さぁ子どもたちの「未来」を話しませんか』汐見稔幸 小学館 2017

自己肯定感を育む人間関係を培うための環境構成と援助の工夫 ～友達とのつながりを感じる伝承遊びを通して～

那覇市立城北こども園 保育教諭 宇禄 真由美

〈研究の概要〉

幼児期の自己肯定感の育ちは、保育教諭や友達との温かい関係の中で、園児が肯定的な経験を重ねながら育まれていく。

本研究では友達と一緒に楽しさを共有し、受け止めてもらう喜びを感じることができる遊びとして伝承遊びを取り上げ、友達とのつながりを感じ、互いを受け止め認め合えるような環境構成と援助の工夫を行った。

保育教諭が伝承遊びの中で「受け止める」「つなぐ」「向き合う」ことや、振り返りの場において経験を「可視化」「共有」「連続する」ことに視点をおいて援助をし、実践に取り組んだ。実践を通して友達のよさに気づき、互いを受け止め認め合う関係作りができたことから、自己肯定感を育む関係を培うことにつながったといえる。

〈研究のイメージ〉

自分や友達のよさに気づき、一緒に活動する楽しさを味わう子

*友達とつながる喜び



*互いを受け入れる経験



伝承遊び



振り返りの場

- ・経験を可視化
- ・経験を共有
- ・経験を連続



保育教諭による援助
幼児理解に基づく環境構成

目 次

I. テーマ設定の理由	1
II. 研究目標	1
III. 研究構想図	2
IV. 研究内容	2
1. 「自己肯定感」を育むために	
(1) 非認知的能力における自己肯定感	
(2) 自己肯定感の育ち	
2. 友達とのつながりを感じる伝承遊びについて	
3. 友達とよりよい関係を築くための環境構成と保育教諭の援助の工夫	
(1) 遊びの場における環境構成と援助の工夫	
(2) 活動前後における振り返りの場の設定と援助の工夫	
V. 保育実践	5
1. 保育計画	
(1) 実態把握（4，5月）	
(2) 保育計画	
2. 実践1「一緒に遊ぶと楽しいね！」（6月中旬）	
(1) 遊びを楽しむ園児の姿	
(2) 考察	
3. 実践2「仲間に入れて～」「いいよ！」（6月下旬から7月上旬）	
(1) 友達の思いを受け止め認め合う姿	
(2) 考察	
4. 実践1・2を通しての園児の変容	
(1) 実践前後の園児の変容（調査結果）	
(2) 抽出児の変容	
(3) 考察	
VI. 実践を通しての考察	10
VII. 成果と課題	10
1. 成果	
2. 課題	

《主な引用文献》